

ったが工員一名が即死した。

工場近くの小高き丘に登って広島市内を見渡せば天満町、土橋の方向に黒煙上がり猛烈な勢いで広がっていた。被害確認のため己斐橋（太田川改修のため現在はありません）、己斐駅周辺を確認、家屋は半壊の状態で大災害の心配はないように見うけられた。

九時過ぎより多くの被災者が負傷して避難してくる。十時より後の被災者の負傷の程度は言語に絶し、衣服は焼け、皮膚は焼け落ち顎（あご）や手先に「ぼろぎれ」の様にをぶら下がり、老若男女の区別もつきにくく、胸の当たりのふくらみでやっと男女の区別が出来る。このような負傷の人たちが己斐橋を渡り、己斐小学校前を通って山道を登る。「薬をくれ」「薬をくれ」その数約五、六

千人。救護の活動何処にも無し。

表現は不適當であるが、「衣服は燃え裸身となり、髪は焼け落ち、顔は外れ顎下にぶらさげ、顔は腫れ、目は閉ざされて見えぬ。腕皮も焼け落ちて指先にぶらさげた、その手で片目を大きく開き、指先にぶらさげた腕皮が視界を妨げるので、顔を傾けてやっと視界を確保。体の皮は焼けてぼろぼろ、あちこちでぶらさげて」「助けてくれ」と呼べども救援する組織（消防・警察・県職員・市職員）も無く。唯火の無い山の方に向かって、被災者は二、三列に並んで行列を作り、のろのろと行進している。その数五、六千人。

「これが本当の地獄だ」私は被害の強烈さに驚いた。

十一時憲兵隊より「一時工場退出、家族の安否を確認し工場に帰還し

ろ」の指示で学徒は工場を退出。家族の安否を気遣いながら一路我が家へ。

広島市立商業学校生徒五十名は、己斐橋を渡り天満町の方向に進むと言う。山崎君と私は左折を薦めたが大多数の生徒は家への近道だと言って直進。私と山崎君二人が左折して北に向い、横川方向に進んだ。その頃より稲妻の走る大雨となる。これが後に話題になる「黒い雨」である。

安芸女学校の南の畑に何時の間にか七十ミ程度の高射砲陣地が出来ていた。数名の高射砲兵が動いていたが高射砲を発射する動きはしていなかった。私の知識で判断すると、射程は五、六千メートルでB-29の飛行高度一万メートルには届かない。艦載機の迎撃がせいぜいである。

このとき、己斐橋より直進した市